

「大崎耕土妖怪繪図」

加美町の伝承を知り地域を巡る



縁切り地蔵尊

てやつて来た頃、城下は荒れ地でした。そこで殿様は、鳴瀬川から水を引き水路を造るよう命じました。

しかし、それは大変難しい工事でした。鳴瀬川の水の取り入れ口と城下町との高低差はほとんどのないため、高度な土木技術

が必要とされました。工事の責任者は、家臣の海老田新蔵人良安。人夫として働いたのは村人たちでした。

一度めの計画は、小黒沢の取水口が壊れたため断念し二年かけて掘つた水路も無駄になりました。二度めの計画は、蟬淵から水を取り入れるもので、途中の台ノ原という台地に、どのように水路を掘るかが大きな問題でした。良安は、夜、篝火をたいて測量を行い台ノ原をトンネルで掘りぬくことにしました。村人は農作業の合間に人力で穴を掘りました。つらくて逃げ出す者もいたり、作物が不作の年はいさかいが起ることもありました。それでも八年めにしてようやく工事は終わり、水が城下まで流れれるかを試すことになりました。殿様や役人たちが見守る中、鳴瀬川からの水は水路をさらさらと流れはじめました。これで、城下の荒れ地にも水が入り、



「ならば父上は、責任者として最後まで工事の指揮をとり、水路を完成させねばなりませぬ。そのために、どうか私を人柱にさせてください」

喜七朗は断固として決心を変えず、ついに良安は息子の願いを受けとりました。そうして、とうとう人柱になる日がやってきました。

喜七朗は埋葬の輿にのせられ、台ノ原へ運ばれました。輿が大きな穴に入られると、お経が読みあげられました。家族や村人は、ただ一心に彼の成仏を祈りました。

穴の中に息つきの竹をさした後、土が盛られ、喜七朗は生きたまま土中に埋められました。息つきの竹からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱える声、そしてかねの鳴るチンチンという音が聞こえていましたが、しだいにそれは細り、ついには聞こえなくなりました。喜七朗が、仏となつたのでした。

その後、工事が再開されました。村人は犠牲となつた喜七朗を朝夕拝みつつ、全力で励みました。その甲斐あつて、水は台ノ原を突き抜け、みごとに城下町まで流れました。おかげで荒れ地は水田となり、米の収穫量も格段に増えたのでした。

人々のために我が身を捧げた喜七朗は、台崎の「縁切り地蔵尊」として祀られています。また、村人たちが掘つた水路の跡は、鳴瀬川の「蟬堰」として残っています。

そこで良安は、三度めの工事を行うため自ら人柱となる決意をしました。水神に生きた人間を捧げることで工事がうまくいくと考えられたからです。

良安は人柱の準備である断食を行をはじめ、家族はそれを悲しい気持ちで見ておりました。

そんな中、良安の息子である十三歳の喜七郎が思いつめた表情でこういいました。

「長年のご苦心を重ねてきた父上が、ここで命を絶つのは残念なことです。どうか、父上の代わりに、私を人柱にさせてください」

「あれ？草がはえてないぞ」
「仁王像を置く建物がありません。そこで男は、自分で建てることにしました。御堂を建てる間、男は農作業ができず、田畠は荒れていきました。
「田んぼの草取りをしなきゃならぬが、暇がない。でも今は、仁王さまの御堂を建てるほうが先だ。おれには雨風を防げる家があるが、仁王さまにはないんだからな」
そうして半月後、やっと御堂が完成しました。さつそく運び入れようとした男は、仁王像を見て首をかしげました。
「仁王さまの手と足が泥だらけになつてゐる」
男は、仁王像をきれいにしてから御堂に入れました。
さて、のび放題になつている草を取ろうと、男は田畠の方へ向かいましたが、そこで自分の田んぼを見るなり、男は目を丸くしました。

物語(3)
草取り仁王さま
昔、北川内村のある男が、
山の中に捨てられた仁王像
を見つけました。
「こんな立派な仁王さまが、
お気の毒に。このままで雨
風に当たってかわいそうだ」
男は村人たちにたのみ、
山から二体の仁王像を運び
出しました。

卷之三

物語②

大蛇に恋した娘

昔、鳴瀬川の近くに美しい娘がいました。ある日娘は、川原で、立派な衣装に整った面立ちの若者に出会いました。二人はたちまち仲よくなり、若者は毎晩、娘の家に通うようになりました。

そんなある日、一匹の大きなヒキガエルが娘にいました。「あの若いやつとつき合うのは、やめておけ。そのうち、よくないことが起ころう」、「あら、どうして？」あの人は、とてもいい人よ

ほほを赤らめる娘を、ヒキガエルはギロリとにらみます。「おれのいうことが嘘だと、思うなら、あいつの着物の裾に、長い糸をつけた針を刺しておけ。そうすれば、あいつの正体がわかる」娘は、ヒキガエルに腹を立てました。でも、その言葉が気になつたので、その夜、若者がやつてくると、こつそり赤い糸をつけた針を着物の裾にぬいつけました。娘は若者のことが心配になり、あちこち探し歩きました。次の日から、若者は娘の家に来なくなりました。娘は、若者のことが心配になりました。そうして川原の近くを通りかけたときに、赤い糸を見つけました。そしたら、川原の近くを通りかけたときに、赤い糸を見つけました。糸をたどって娘が行きついたのは、深い川のほとりでした。



草はうとうになつてゐるはずの田んぼに、雑草は一本も見当たりません。男はふと、仁王像の泥だらけの手足を思い出し、ポンと手を打ちました。「どうか、仁王さまが草取りをしてくれたんだ！」その後、男の田んぼには雑草が生えなくなつたということです。そしてこの仁王像は「北川内の如来堂」に今も安置されています。



※これらは地域の伝承をもとに作られた物語です

